

大学生の自己開示抵抗感についての一考察

——開示者の内的作業モデル及び被開示者の受容的反応イメージとの関連で——

篠 倉 拓 也

はじめに

自己開示抵抗感といった自己開示する際の個人の主観的要素である考えや気持ちを捉えることにアプローチしたものである。

目的と方法

自己開示抵抗感といった個人の内面性について検討していくことを目的とし、被開示者の受容的反応との関連及び IWM からの影響過程の検討を目的とした研究Ⅰと個人の自己開示抵抗感の質や構造の検討を目的とした PAC 分析を用いた研究Ⅱを行った。

結果と考察

研究Ⅰから、被開示者が親しいと感じる同性の友人であれば、「自己の傷つき」が高くても被開示者から「真剣な姿勢」「共感」といった受容的反応を得られると感じていた。自己開示抵抗感が低、中群であれば、「関係変化回避」が高いと「真剣な姿勢」、中群のみ「親身な行動」といった受容的反応を得られないと感じていたが、高群では、「関係変化回避」と受容的反応に関連がなかった。これらは常に被開示者を傷つけないよう意識し、円滑な関係を保とうとするため「関係変化回避」といった自己開示抵抗感是被開示者から受容的反応を得られないと感じているのであろう。また、どの群も「自己開示拒否」に影響していたのは、「回避型」であり、低、中群においては「安定型」の低さが「自己開示拒否」に影響し、中、高群では「両価型」が「関係変化回避」に影響していた。これらは被開示者と関係を取ろうとしない対人関係パターンが強いため、自己開示欲求を抑圧する自己開示抵抗感の考えにつながっていることや、本音でつき合える様な深い関わりを相手に求めながらも相手を尊重し自他を傷つけない様にしようとするのが「関係変化回避」といった自己開示抵抗感を抱きやすいと示唆した。

研究Ⅱでは、被開示者と自分が異なった感情状態であること、個人的な話題があること、被開示者との信頼関係を懸念する、といった3名それぞれ構造の内容に違いは見られたが、3名とも自己開示抵抗感を感じる項目は全て否定的なイメージであった。しかし、自己開示抵抗感の低、中群の協力者は個別に捉えた場合には否定的であるが、全てを含めた自身の自己開示経験となった場合には、肯定的な方向に向かっていることがうかがえた。さらに、中群と高群の協力者が感じる自己開示抵抗感自身は自身が傷つくとした対自的抵抗感であった。一方、低群の協力者が感じる自己開示抵抗感自身は自己の印象や被開示者との関係が変化することを懸念する対他的抵抗感であった。